

手術療法部会設立に向けた資料

高知県医療の全体像と手術療法の位置づけ

- 高知県は人口当たりの病床数が全国1位で、医療資源（病床・医師・看護師）が多い一方、**中央医療圏（高知市周辺）**への**一極集中**が顕著。**手術**を伴う高度急性期・急性期医療は**特に中央医療圏**に集約されている。
- 県全体は高齢化が全国に先行して進行しており、今後も外科手術の対象はがん・心血管疾患・整形外科疾患など高齢者関連が中心。
- 高知県全体のがん手術は、年間おおよそ6,000～8,000件規模と推定される（急性期手術の大半ががん関連）。

（参考資料）

https://www.shikokubank.co.jp/ser/resources/image/pdf/report/thinktank-news/2025_02_28.pdf

診療統計-高知大学医学部附属病院 (kochi-u.ac.jp)

統計・実績データ | 高知医療センター (khsc.or.jp)

診療統計・年報 - 病院のご案内：日本赤十字社 高知赤十字病院 (jrc.or.jp)

第8期高知県保健医療計画 | 高知県 (kochi.lg.jp)

手術療法を担う主な医療機関と手術実績

中央医療圏（高知市周辺）

- 高知医療センター：県内の基幹急性期病院の一つ。
- 高知大学医学部附属病院：高度急性期・高難度手術と専門医養成の中核を担っている。
- 高知赤十字病院：外科・整形外科・脳神経外科を中心に一定規模の手術が行われている。

中央以外の医療圏（安芸・高幡・幡多）

地域の中核病院が一般外科・整形外科・消化器外科などの標準的手術を担い、高度・専門的手術は中央医療圏へ紹介される構造。

手術療法の集約化

がん罹患数の見込み

がん罹患率は年齢とともに上昇する傾向にあり、2021年のがん罹患患者数 98.9 万人のうち、76%は 65 歳以上である²。2040 年に向け、生産年齢人口の減少により、64 歳以下のがん罹患患者数は減少するものの、65～84 歳のがん罹患患者数は横ばいで推移し、85 歳以上のがん罹患患者数は団塊の世代の高齢化により増加が見込まれ、がん罹患患者の総数は横ばいからやや増加すると見込まれる。

がん罹患者の地域特性

2040 年に向けて、都道府県単位では、がん罹患患者数が都市部を中心に 16 都府県で増加する一方で、31 道県で減少することが見込まれる。二次医療圏単位では、大都市部³の 88%でがん罹患患者数は増加する一方で、地方都市部の 59%、過疎地域の 98%で減少することが見込まれる。年齢階級別では、64 歳以下のがん罹患患者数は、大都市部の 90%、地方都市部の 97%、全ての過疎地域で減少することが見込まれる。65～84 歳のがん罹患患者数は、大都市部の 67%で増加する一方で、地方都市部の 90%、過疎地域の 98%で減少することが見込まれる。85 歳以上のがん罹患患者数は、過疎地域の 2%を除き、全ての二次医療圏で増加することが見込まれ、その傾向は大都市部・地方都市部では増加率平均が 40%を超えることが見込まれる。

手術療法

医師の総数が 2022 年時点で 34.3 万人（2012 年時点で 30.3 万人）と、過去 10 年間で 13%増加しているにもかかわらず、外科医の総数は過去 10 年間ほぼ変わっておらず、特に消化器外科医については、2022 年時点で約 1.9 万人（2012 年時点で約 2.1 万人）と、過去 10 年間で 10%減少している。さらに、40 歳未満の若手消化器外科医については、減少幅がより大きく、過去 10 年間で 15%減少している。日本消化器外科学会によると、消化器外科医は現状 60 歳代が最も多く、今後、診療の中心を担うものと考えられる 65 歳未満の消化器外科医の数は減少すると予測されている。

手術療法の需要は、2040 年に向けて、都道府県単位では、前述の通り、人口構造の変化が異なる東京都と沖縄県の 2 都県で増加する一方で、その他の 45 道府県で減少することが見込まれる。二次医療圏単位では、大都市部の 54%、地方都市部の 92%、過疎地域の 98%で需要が減少することが見込まれる。

委員構成（案）

拠点等	医療機関名	役割
都道府県がん診療連携拠点病院	高知大学医学部附属病院	部会長
地域がん診療連携拠点病院	高知医療センター	
	高知県立幡多けんみん病院	
がん診療連携推進病院	高知赤十字病院	
	NHO高知病院	
地域がん診療病院	高知県立あき総合病院	